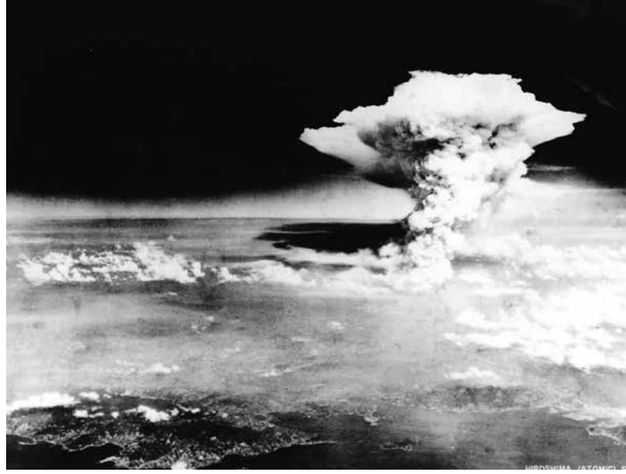
あの日を語る

1945（昭和20）年8月6日、8時15分。エノラ・ゲイから投下され上空600メートルでさく裂した原子爆弾は、一瞬で広島を焼野原にし、多くの命を奪いました。

そのとき、何があり、その後、どのようなことを感じたのか――。体験と思いを語る、証言と手記から、被爆の実相に迫りました。



米軍機より撮影したきのこ雲

撮影：米軍　提供：広島平和記念資料館

安芸高田市原爆被爆者友の会　会長
玉川 祐光（たまがわ ゆうこう）さん（82歳・向原町）

火傷を負い爆風で気絶

8月6日、広島二中（現観音高校）に通っていた私は、爆心地近くで建物疎開作業をするため、住んでいた賀茂郡西条町（現東広島市）から広島駅へ向かいましたが、空襲警報発令のため遅れて到着しました。市電を待っているときに、突然、電気のスパークの様な青白い光を感じ、熱線により顔の右半分と手の甲に火傷を負い、猛烈な爆風により吹き飛ばされ、原爆が投下された爆音を聞く前に気絶してしまいました。意識を取り戻し、周囲を見ると、あたりが真っ暗で夜明け前のようでした。少しずつ視界が開けてきて、市内のほとんどの建物が崩壊してしまったということがわかりました。二葉の里に軍の東練兵場があるので、そこに行こうと思って歩き始めましたが、その途中で、倒壊した家屋に下半身が下敷きになっている人、大きな声でわめいている人、多くの凄惨な状況を見ました。今でも思い出すのが辛いです。その後、家へ帰るため歩き出し、1日かけて家に到着しました。家の前には心配した母が立っていましたが、やけどした私の顔が分からず、「あんた本当に祐光か？」と言った言葉が耳にこびりついています。

多くの方々に助けられ今を生きている

私の家の筋向いに、おそらく徴用で日本に連れて来られた朝鮮の方が住んでいたのですが、私のことを息子のようにかわいがってくれていました。私の状態を見ると、自分の郷（くに）ではこれがやけどにいいんだ、と言って、一升瓶に入れた牛の血を持ってきてくれました。それをコップ2杯ずつ飲み、その甲斐あってか、やけどが治りました。

被爆から13年後、私は沖永良部島の製糖工場で働いていました。島には米軍の電波探知基地があり、ある日、私の乗っていた車と米軍の車が正面衝突し、大腿骨を複雑骨折する大けがを負いました。当時、米政府は沖縄を占領統治していて、沖縄は「日本」ではなかったにも関わらず、ヘリコプターで沖縄にある米軍の病院に搬送・手術、そして東京の日赤中央病院への転院に至るまで、全て米軍がやってくれました。転院後に、日赤中央病院の主治医の先生と、被爆当時に朝鮮の方から牛の血をもらった話をすると、牛の血は死滅した細胞を再生する最大の特効薬であり、そのおかげでケロイドができなかったのではないか、と教えてもらいました。その朝鮮の方は、日本のことをよく思っていなかったと思いますが、私のことを助けてくれました。米軍と事故に遭ったときには、人命救助を最優先し、日本人である私をすぐに病院に搬送してきちんと治療をしてくれました。

戦争というものは本当に愚かですが、平時には、国境は関係なく人間は人を助けてくれます。そうやって多くの方々に助けられて、私は今日まで元気でいることができるのです。相手を思いやる気持ちを素直に表現できる世の中になることを願っています。

中国新聞社屋上から東方向を望む

撮影：中田 左都男
提供：広島平和記念資料館

原爆が投下された時、美土里町出身で当時、吉田高等女学校2年生だった尾田（旧姓：津田）久美子さんは、吉田町吉田新町にいました。トラックに乗って多くの罹災者が搬送されてくる状況や、吉田病院で救護に当たった時の様子などを、詳しく手記に記されています。

原爆の記憶

尾田 久美子

戦後70年、私は女学校の二年生でした。原爆が広島に投下された日の事は、余りに強い思い出で、いまだに心に深く焼きついています。そのあとの一ヶ月余りの看護活動はだんだん年と共に風化しています。が、断片的に覚えていることを書いてみます。

昭和二十年八月六日、朝八時十五分、私達は朝礼で校長先生の訓示を受けていました。“ピカッ”“あれっ？”どーん。何だろう。一瞬何が何だかわからずざわめきが広がりました。ちょうどいたずらに大きな鏡で太陽を反射された様な感じで、教室の窓を見上げたりしました。その時、あれは何だと云う声がして、ふり返ってみると、もくもくと黒い煙が異様な形でふき上がっています。見る間に、きのこ状に高く高く舞い上がっていきます。　―中略―

その日は予定通り鍬をかついで山の開墾に出かけました。その当時は一株の芋でも多く植えられる様に山を切り開いて畑にすることが毎日の授業の代りでした。三時頃学校に帰り日課の水泳訓練に近くの川へ行きました。川に入ったと思ったら「みんな上がれ」と叫ぶ先生の声で上りました。広島に大きな爆弾が落ち、けが人が一ぱい出て、町にどんどん運ばれているから、すぐに帰って手伝う様にと。町に戻ったら、トラックに一ぱいに積み込まれたけが人、男女、子供、その時のショックは余りに大きく忘れることが出来ません。

着衣は殆ど無く、パンツや雑巾がまとわりついた様に僅かにくっつき、皮膚は焼けただれぶら下がり、目も鼻もわからない位、丸太ん棒の様な手や足、次々と降ろされてむしろを敷いた病院の土間に並べられました。私は友達と吉田病院で看護に当たりました。看護と云っても、お医者さんと看護婦さん二、三人では、どうすることも出来ず、只うめく罹災者に手が廻らず、うちわで蠅を追っぱらったり、少しでも涼しくと冷いタオルで拭いてあげたり水、水、とうめく人にほんの少し水をあげたりするだけ。白黒の縞のシャツの人は黒い所は焼けただれ白い所は健康な皮膚とはっきり縞になり、絣（かすり）の模様の着衣の人は、その模様のままにはっきりやけどをしていました。　―中略―

おばさんが、しきりに子供の名前を呼び、小さな子供が「お母さん、お父さん」と呼び自ら目の前で静かに息を引き取りました。手当たり次第にトラックに積んで、見も知らぬ土地に運び込まれて、何の手当も受けられず亡くなってゆく惨状。外見は、やけどもなく、数日して体に大豆位の黒い斑点が現れ、青ぶくれた苦しそうな顔で「寝かせて、起こして」とその度に支えて起こしたり、寝かせたり、やがて動きが止まり、係の人が戸板に乗せて焼場に運んで行きました。　―中略―　やけどが、表面はかさぶたになり、下の方の生乾きで崩れているところに五ミリくらいの白いうじ虫がうようよと這っています。うじを取ってくれと云われても、ピンセットも無く、お箸ではとれなくて、只うちわで風を送るのみでした。　―中略―

教室の板の間に只、ごろんところがっているだけ、町内からせんべい布団が届けられたりしていましたが、昨日までは生きていた人が今日は居ない。だんだんと数も減って来ます。毎日死者を焼く火葬の煙が終日ただよってその匂いが町内を充満していました。

この世の生き地獄を体験して本当にあった事かと夢の様です。私達の年代で覚えている人も少なくなりました。長くなりましたが私の体験を聞いて頂きたく、あの事があって今の平和がある事を若い人にも知って頂きたいと思います。戦争がどんなに悲惨なものか、あってはならないことを強く願います。

背全面に火傷を負う若い兵士

撮影：陸軍船舶司令部写真班
提供：広島原爆被災撮影者の会

負傷者を郊外に運ぶトラック

撮影：松重 三男
提供：広島原爆被災撮影者の会

本川国民学校校庭と思われる死体の火葬場

撮影：川本 俊雄
提供：川本 祥雄

※画像、内容の無断利用はかたくお断りします
Copying photos and sentences without permission is prohibited.